

# 障害者スポーツにおける 国際競技力向上政策



早稲田大学スポーツ科学部  
間野義之研究室 3年

# 目次

1. 緒言

2. 研究目的

3. 調査概要

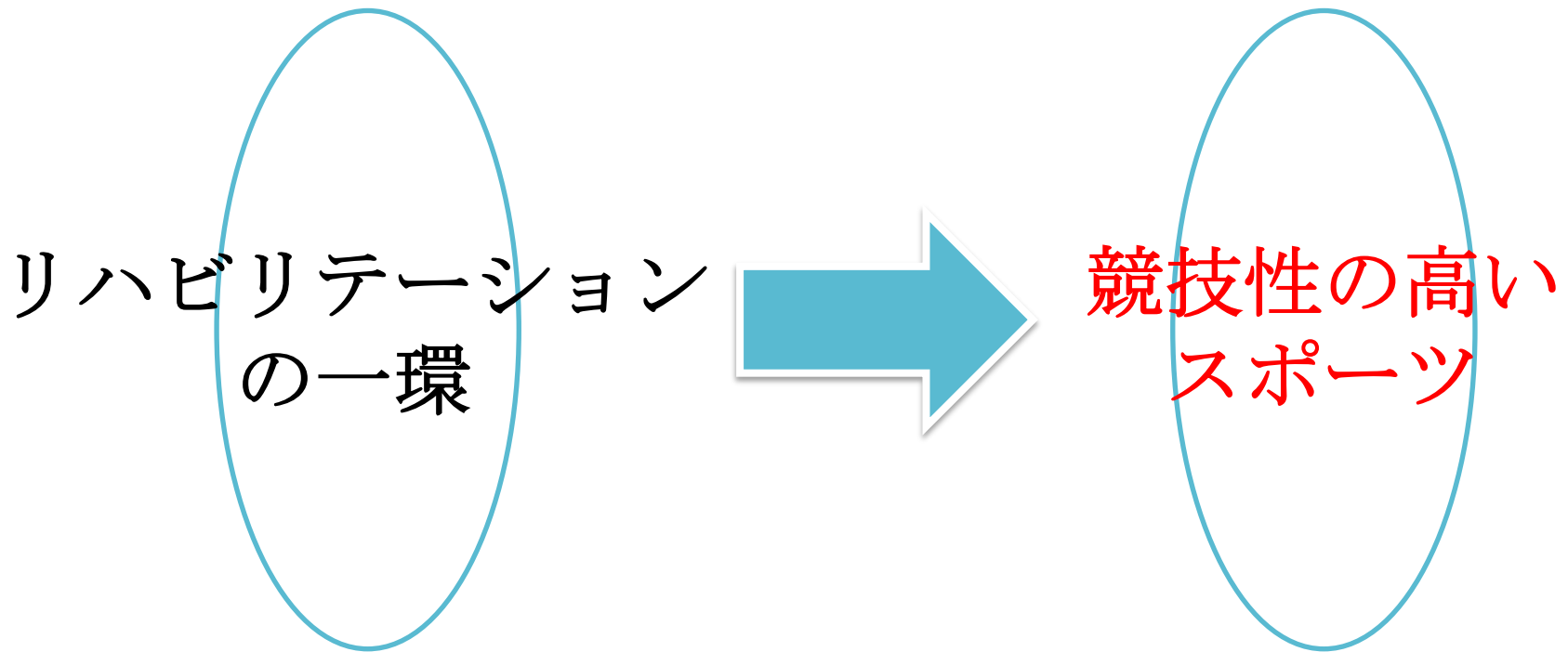
4. 結果および考察

5. 結論

6. 政策提言

# 1. 緒言

## 障害者スポーツの変遷



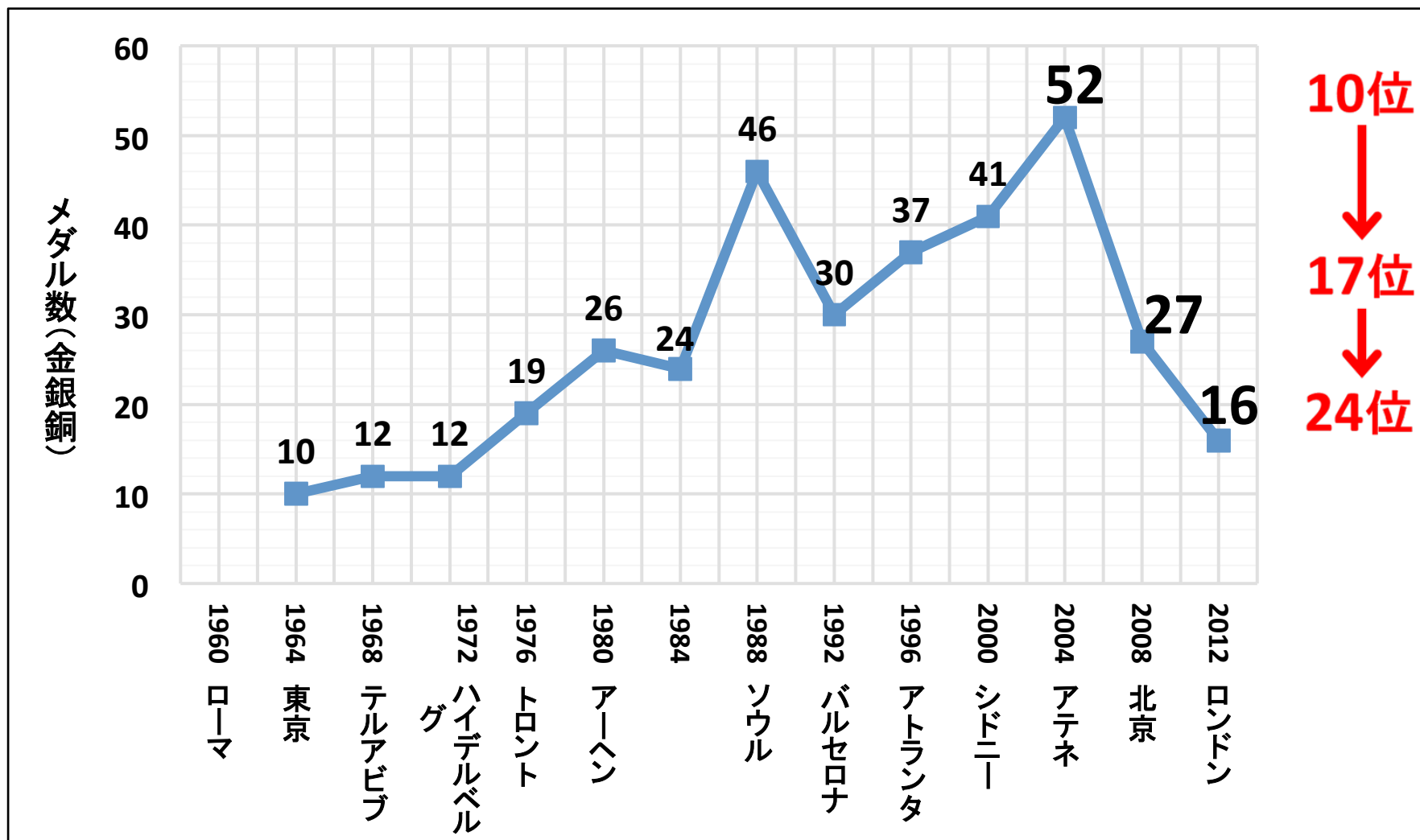
日本障害者スポーツ協会は  
2020年開催のパラリンピックに向けて



しかし！！

世界トップ10入りを宣言！

# 日本選手団のメダル獲得状況



## 1-2. 文献調査

- 清川 (2002) … 競技成績をスポーツ経営の成果として捉える重要性



- 阿部 (2007) … タレント発掘・育成
- 岸川ら (2012) … 国際競技大会の招致  
スポーツ政策への投資額
- 松田 (2008) … メディカルサポート

包括的視点からのアプローチ

# 1-3. 先行研究

- De Bosscher (2006) … 国家としてのスポーツ政策が競技スポーツに与える影響

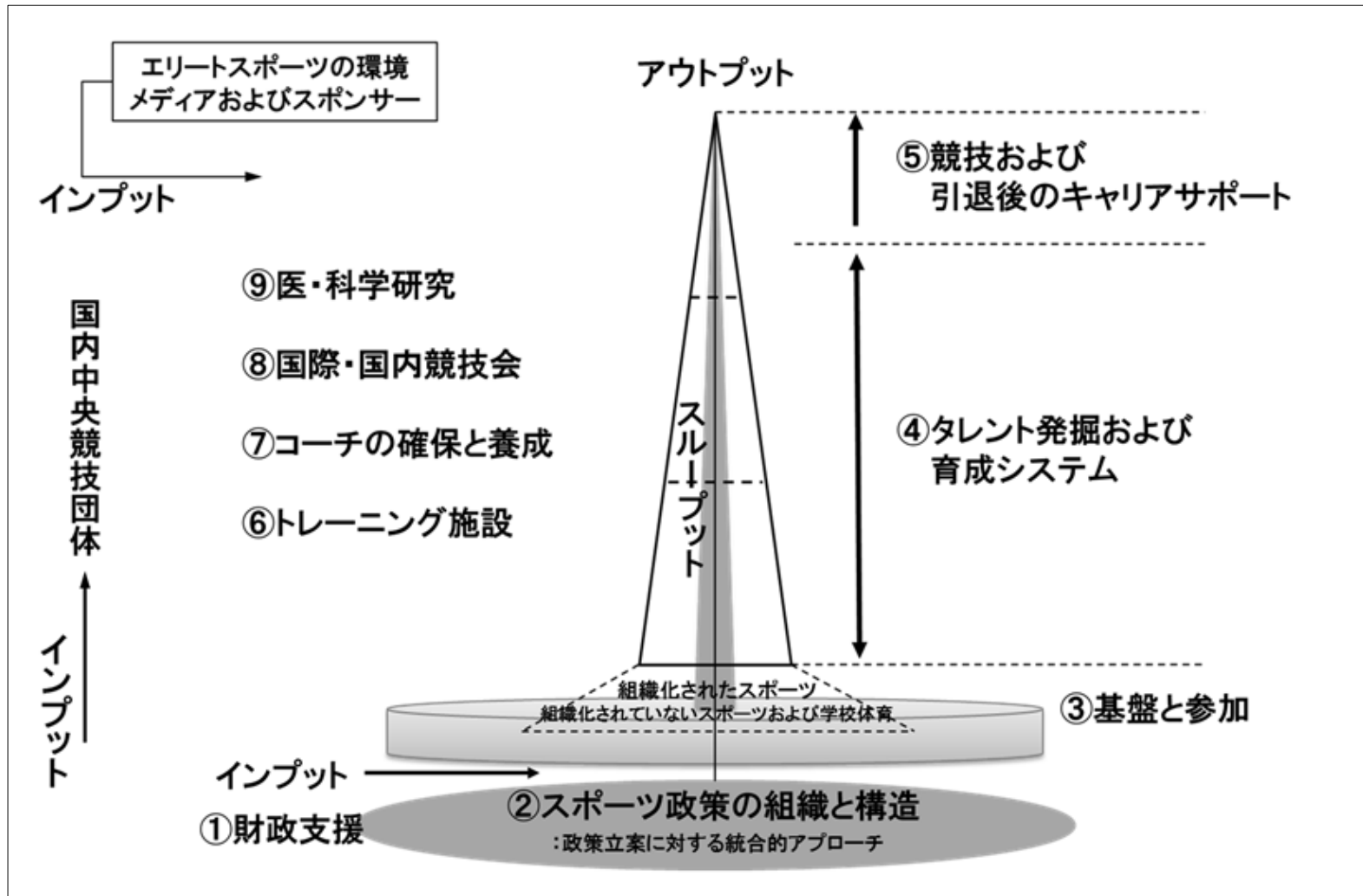


包括的視点からのアプローチとして

SPLISS (Sports Policy factors Leading to International Sporting Success) モデル

を考案

# SPLISSモデル





日本の障害者スポーツに  
SPLISSモデルを適用させた事例は無い

そこで

SPLISSモデルを用いて  
日本の障害者スポーツにおける  
国際競技力向上の問題を探っていく

## 2. 研究目的

日本の障害者スポーツにおける  
国際競技力向上の現状に  
SPLISSモデルを当てはめて分析することで

日本の障害者スポーツにおける  
国際競技力向上の課題

を明らかにすること

# 3-1. 調査概要

## 【対象者】

- ① パラリンピックに連続出場経験を持つ現役アスリートA氏
- ② 現役時代パラリンピック大会において多くのメダルを獲得し、現在は競技連盟に役職を持つB氏

## 【インタビュー実施日・所要時間】

- ① 2013年7月24日・約50分間
- ② 2013年9月5日・約80分間

## 3-2. 調査概要

### 【調査方法】

非構造化インタビューを用いた質的調査

### 【質問内容】

「日本の障害者スポーツに不足しているものは何か」

### 【分析手法】

漸次構造化法…問題設定、データ収集、データ分析、エスノグラフィーの執筆の4つの作業を同時進行させていく中で設定した問題と仮説を構造化し、徐々にエスノグラフィーを完成させていく方法。

# 逐語録作成



# 漸次構造化法

## ○分析例

A氏「一番きついのは強化費が無い。強化費も、（健常者の）連盟の方はS（ランク）からA,B,Cってあって。Sは300万とか。で僕らは一応A,B,Cあるんだけど、あくまで年間いくらくれるっていうのじゃなくて、合宿に対する補助って感じなんだよね。」

A氏は現在最も不足としているものとして財政を挙げ、強化費は選手個人ではなく合宿の補助などに使われていると述べた。これはSPLISSモデルにおけるピラー1に該当している。ピラー1はSPLISSモデルの中でも、インプットに当たる最も根幹をなす部分である。一方B氏も同様に最も不足しているものとして財政を挙げている。

# 漸次構造化法

## ○分析例

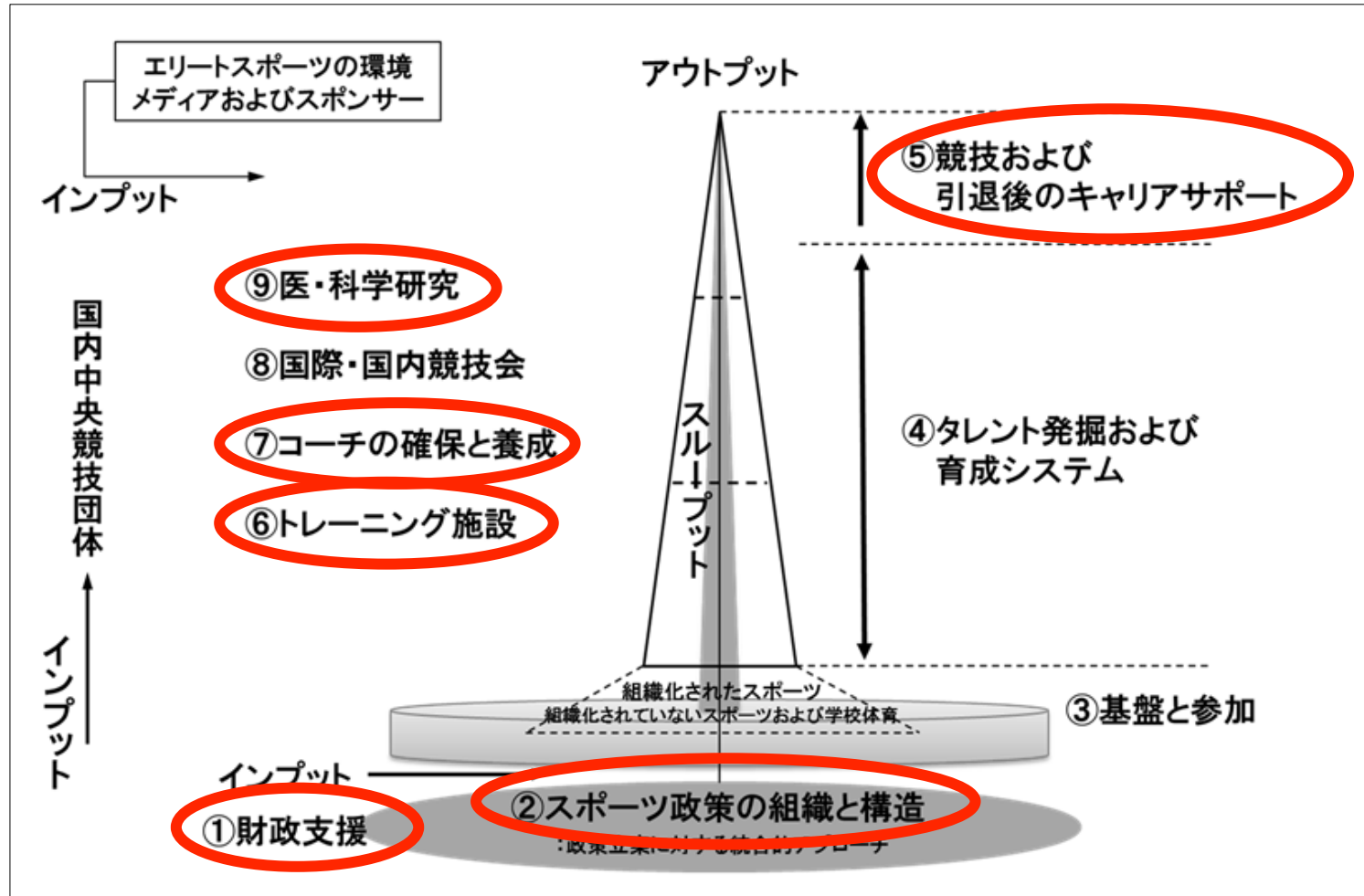
B氏「**財政はやっぱり連盟ももちろん厳しいし、一選手としても厳しいよね。**強化をするときの合宿のお金とかを、選手に補助するために出すんですけれども、単純に考えると合宿にかかる予算っていうのは、交通費と、宿泊費、食費、あとはまあ施設使用料ですよ。こんなもんとあとはもうコーチの人件費ですよ。」

B氏は**選手と連盟の二つの立場から財政不足を指摘し、強化費が必要最低限の支給である事を述べた。**

A、B両氏の発言でピラー1が検出された事から、**日本の障害者スポーツにとって財政の問題は深刻である事が分かる。**このピラー1の原因として、A、B氏はさらに日本における現段階の政策について言及している。

# 4. 結果および考察

## A、B氏へのインタビューから検出されたピラー

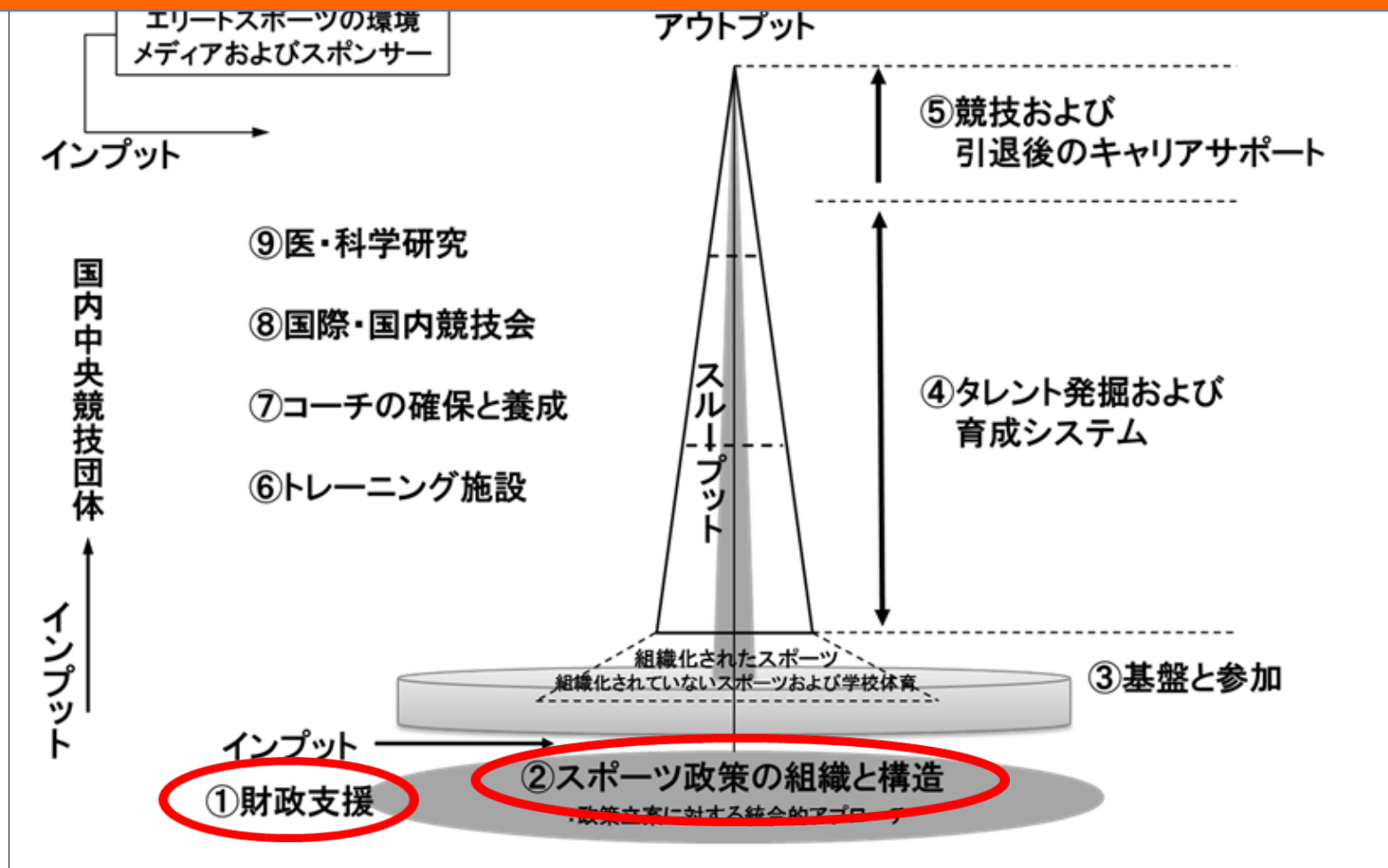




## 4-2. 考察 ①, ②について

SPLISSモデルにおけるピラー	A氏	B氏
① 財政支援	○	○
② スポーツ政策の組織と構造	○	○
③ 基盤と参加	×	×
④ タレント発掘および育成システム	×	×
⑤ 競技および引退後のキャリアサポート	○	×
⑥ トレーニング施設	○	○
⑦ コーチの確保と養成	○	○
⑧ 国際・国内競技会	×	×
⑨ 医・科学研究	○	×

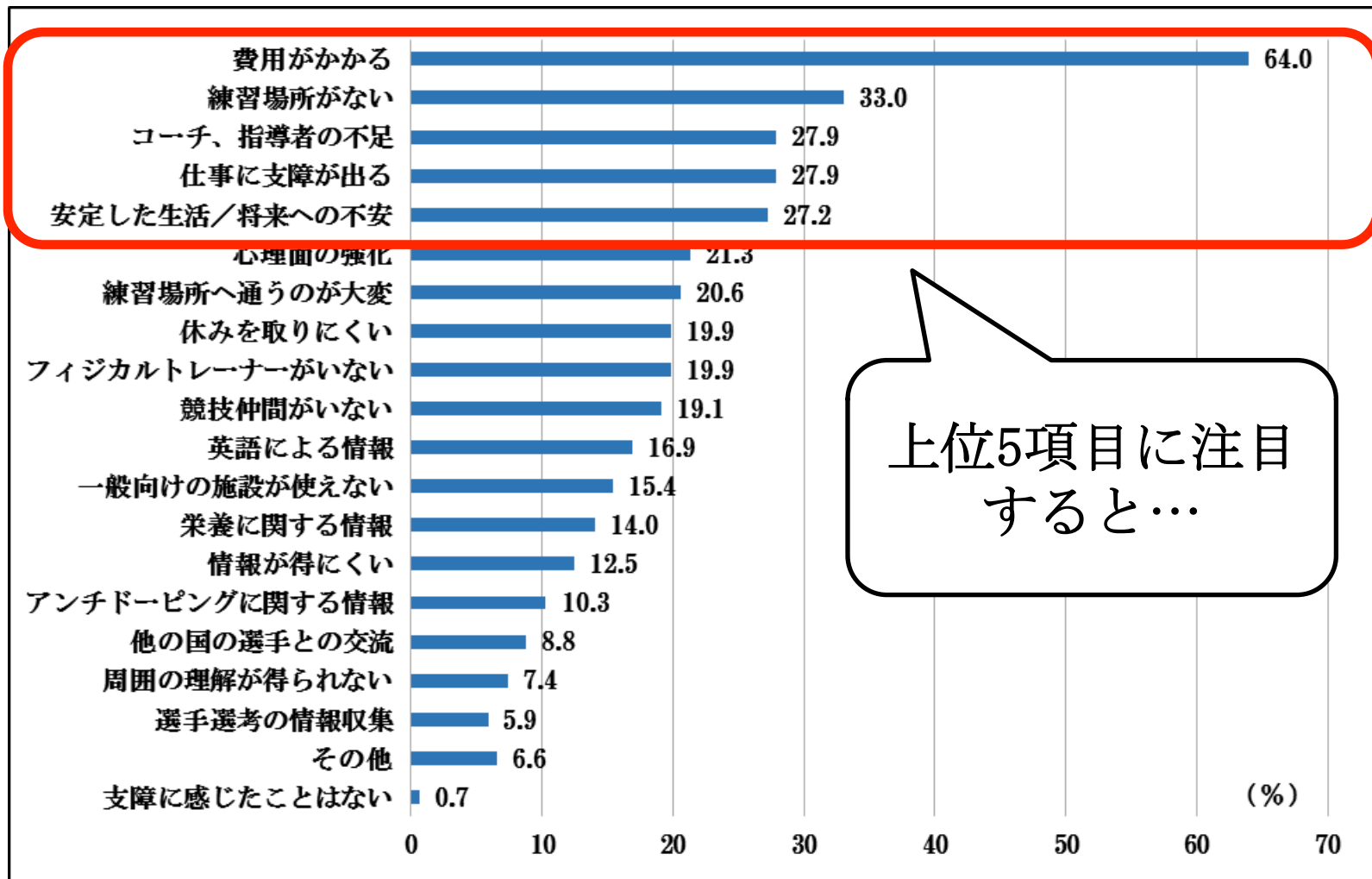
# 両者の回答より出た1、2は SPLISSモデルの中でも全ての根幹である



## 4-3. 考察 ⑤, ⑥, ⑦について

SPLISSモデルにおけるピラー	A氏	B氏
① 財政支援	○	○
② スポーツ政策の組織と構造	○	○
③ 基盤と参加	×	×
④ タレント発掘および育成システム	×	×
⑤ 競技および引退後のキャリアサポート	○	×
⑥ トレーニング施設	○	○
⑦ コーチの確保と養成	○	○
⑧ 国際・国内競技会	×	×
⑨ 医・科学研究	○	×

# 競技活動を行う上での支障



上位5項目に注目  
すると…

日本パラリンピアンズ協会(2012)『第2回 パラリンピック選手の競技環境 その意識と実態調査 報告書』  
「競技活動を行う上で、あなたが苦労した(している)こと、競技活動を継続する上で支障に感じることは何か」(複数回答)

# 競技活動を行う上での支障



- ・練習場所がない(33.0%)

→ 「⑥ トレーニング施設」

- ・コーチ、指導者の不足(27.9%)

→ 「⑦ コーチの確保と養成」

- ・仕事に支障が出る(27.9%)

- ・安定した生活/将来への不安(27.2%)

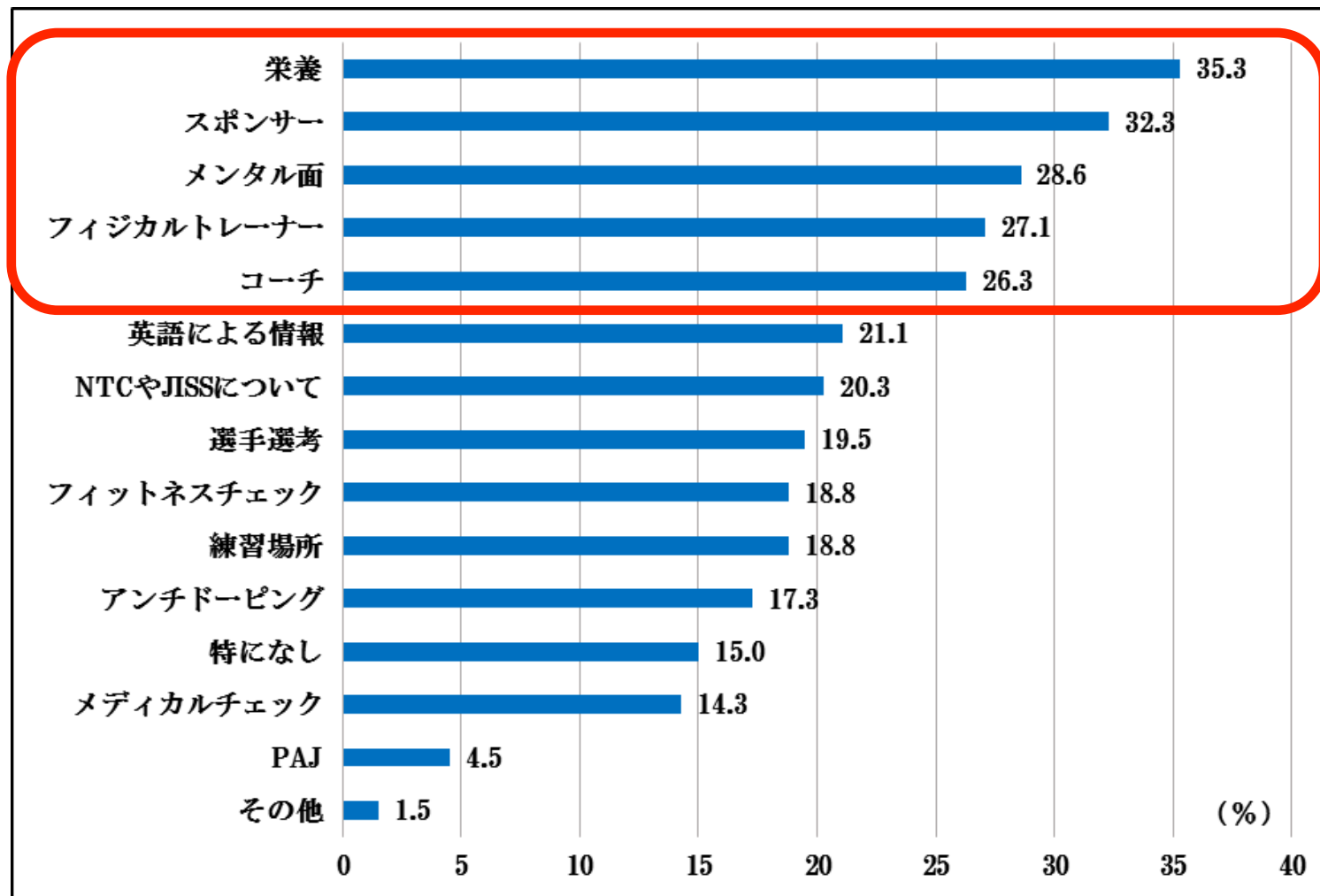
→ 「⑤ 競技および引退後のキャリアサポート」

それぞれのピラーに  
当てはまる！

## 4-4. 考察 ⑨について

SPLISSモデルにおけるピラー	A氏	B氏
① 財政支援	○	○
② スポーツ政策の組織と構造	○	○
③ 基盤と参加	×	×
④ タレント発掘および育成システム	×	×
⑤ 競技および引退後のキャリアサポート	○	×
⑥ トレーニング施設	○	○
⑦ コーチの確保と養成	○	○
⑧ 国際・国内競技会	×	×
⑨ 医・科学研究	○	×

# 競技を行う上で必要な情報



日本パラリンピアンズ協会(2012)『第2回 パラリンピック選手の競技環境 その意識と実態調査 報告書』  
「競技を行う上で必要な情報は何か」(複数回答)

# 競技を行う上で必要な情報



1位 栄養 (35.3%)

3位 メンタル面 (28.6%)

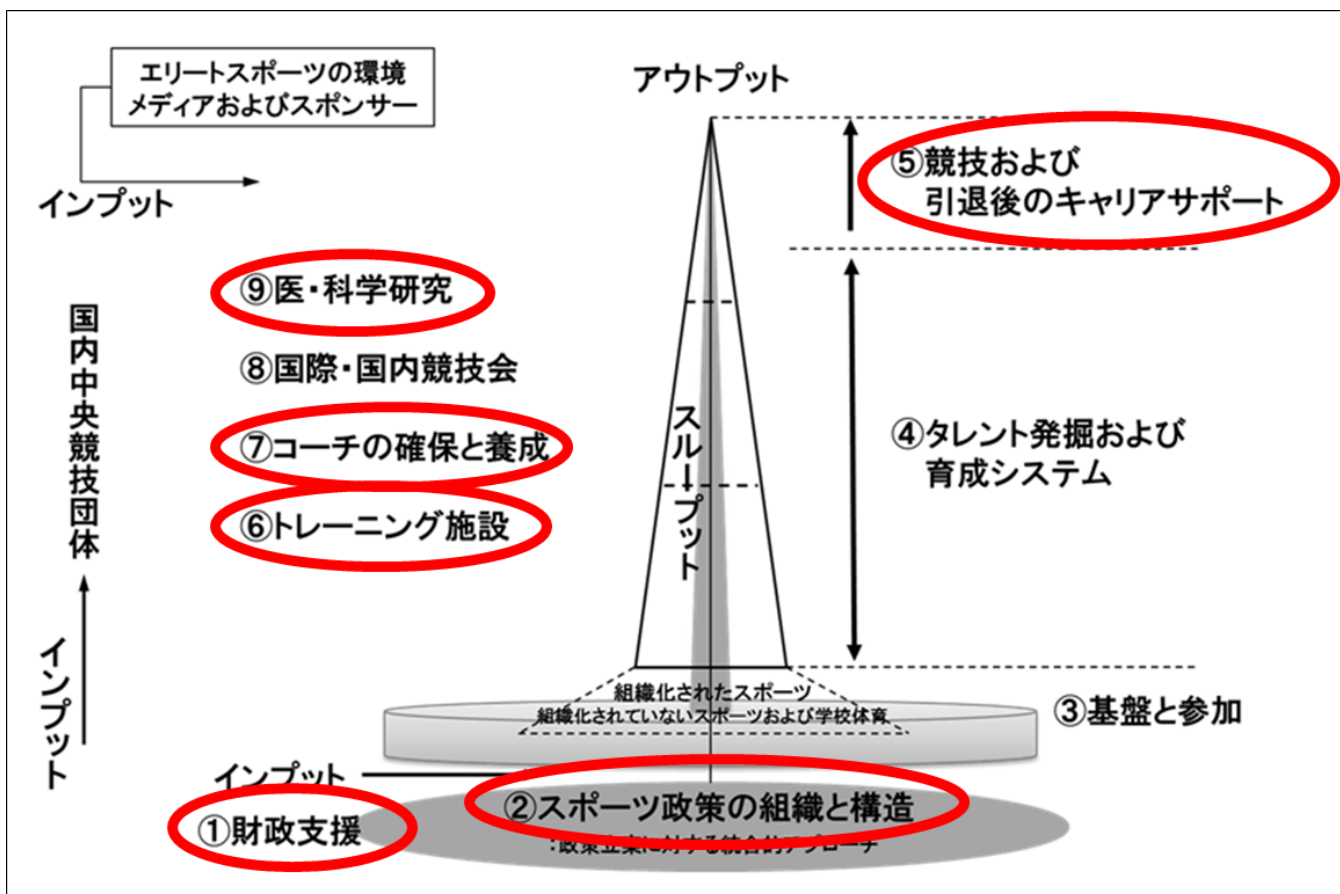
4位 フィジカルトレーナー (27.1%)

上位5項目中3項目が医科学サポートに関するもの  
→ 「⑨医・科学研究」の重要性



# 5. 結論

## SPLISSモデルに当てはめた 日本の障害者スポーツにおける国際競技力向上の課題



# 政策提言に向けて



# 障害者スポーツ強化部門の 文部科学省一本化

しかし

①財政支援

⑥トレーニング施設

⑤競技サポート

⑨医・科学研究

## ⑦コーチの確保と養成については…

普及を目的としたプランはあっても、  
トップレベルに対する施策は

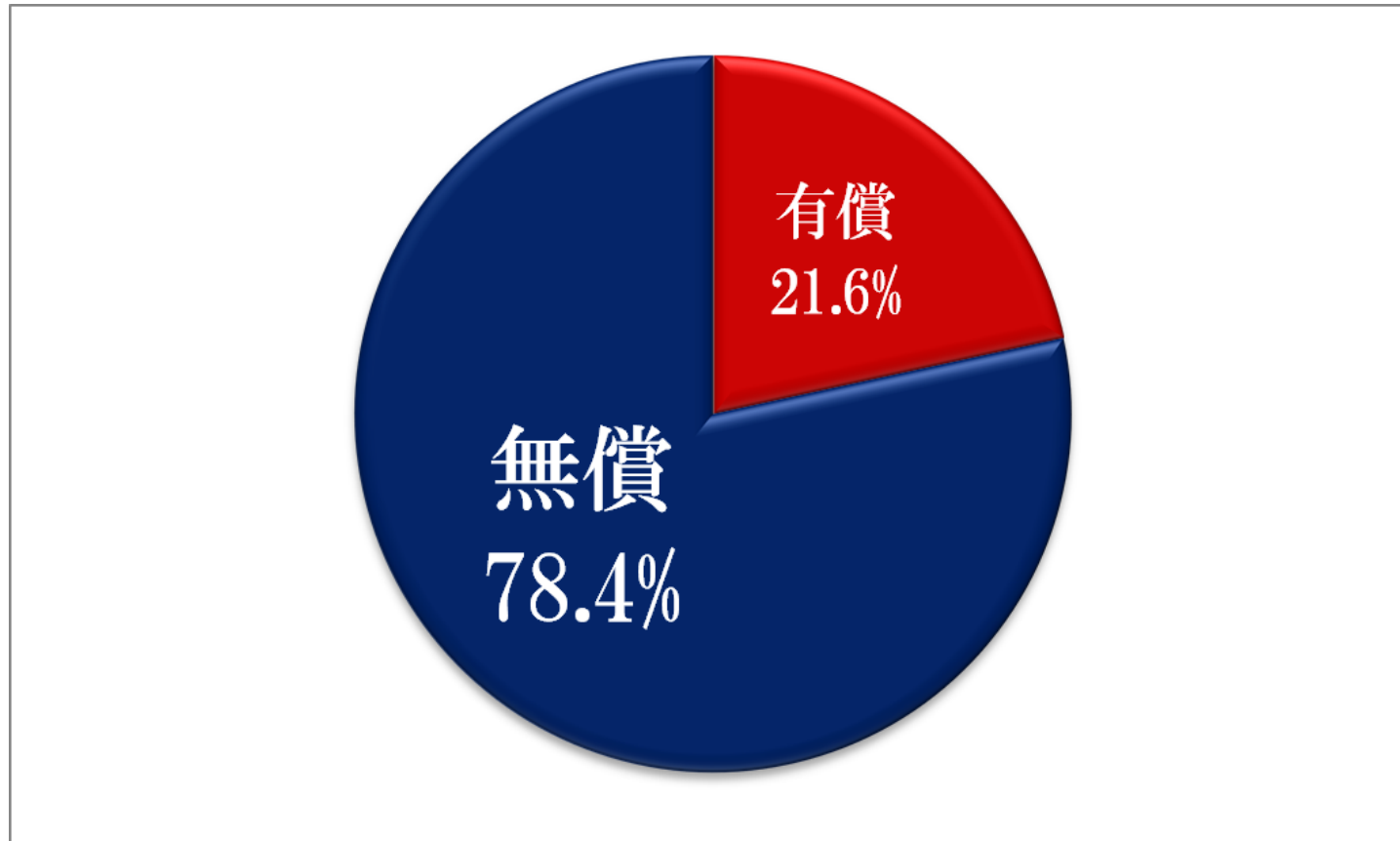
打ち出されていない

# 障害者スポーツ指導の現状

日本障害者スポーツ協会公認 障害者スポーツ指導者資格			登録人数 (2011年度)
障害者スポーツ指導員	初級	初心者レベルの対象者への指導	18,841名
	中級	地域レベルのリーダーとして指導	2,395名
	上級	県レベルのリーダーとして指導	688名
障害者スポーツコーチ	各種競技別の競技者の強化・育成などを行う者		99名

日本障害者スポーツ協会「指導者養成概要」を元に作成

# コーチの報酬の有無



日本パラリンピアンズ協会(2012)『第2回 パラリンピック選手の競技環境 その意識と実態調査 報告書』

「コーチ謝礼は無償か、それとも有償か」を元に作成

プロ化が進む  
選手



アマチュアレベルに留まる  
コーチの指導

効果的かつ継続的な国際競技力向上を考える上で、  
トップレベルでのコーチの確保と養成は不可欠

## 6. 政策提言

トップアスリート育成に向けた  
新しい障害者スポーツコーチ制度



# トップアスリート育成に向けた 新しい障害者スポーツコーチ制度

(1)引退したパラリンピアンを対象に  
日本障害者スポーツ協会が認定する  
障害者スポーツコーチの特別枠を設置

(2)すべての障害者スポーツコーチを  
A, B, Cの3ラ  
全国の障

現在定められている  
資格条件は？

# 障害者スポーツコーチ資格の 現在の取得条件

①コーチとしての活動経験

②養成講座の受講

③検定試験の合格

④協会会長による審査の通過

# 障害者スポーツコーチ資格の 特別枠の取得条件

①パラリンピックへの出場経験

②養成講座の受講

③検定試験の合格

④協会会長による審査の通過

# トップアスリート育成に向けた 新しい障害者スポーツコーチ制度

- (1) 引退したパラリンピアンを対象に  
日本障害者スポーツ協会が認定する  
障害者スポーツコーチの特別枠を設置
- (2) すべての障害者スポーツコーチを  
A, B, Cの3ランクに分類、  
全国の障害者スポーツ施設に配置

# 障害者スポーツコーチのランク分け

Aランク	東京都障害者総合スポーツセンターにおける 現役パラリンピアンコーチング
Bランク	全国の障害者スポーツセンター(114カ所)における 常勤コーチ
Cランク	全国の障害者スポーツセンター(114カ所)における 常勤コーチの補佐と庶務

指導レベル保持のため  
定期における免許更新手続きを義務付ける

# 期待される効果

(1)引退したパラリンピアンを対象とした  
障害者スポーツコーチ資格の特別枠の設置

## ⑦コーチの確保と養成

(2)障害者スポーツコーチを3ランクに分類、  
全国の障害者スポーツ施設に配置

Aランク取得者

東京都障害者総合スポーツセンターにおける  
現役パラリンピアンへの指導

トップレベルの指導の充実→国際競技力向上へ

# 付随する効果

(1) 引退したパラリンピアンを対象とした  
障害者スポーツコーチ資格の特別枠の設置

⑤引退後のキャリアサポート

(2) 障害者スポーツコーチを3ランクに分類、  
全国の障害者スポーツ施設に配置

B・Cランク取得者

常勤コーチ・スタッフとして  
全国の障害者スポーツ施設に配置

③基盤と参加

# 社会的意義

国際競技力向上によって

→メダル獲得数の増加

→障害者スポーツへの関心を高める

→すべての人々の繋がりを深める

→より良い社会を構築



# 参考文献

- 笹川スポーツ財団(2011)「スポーツ白書 スポーツが目指すべき未来」
- 厚生労働省(2009)「政策レポート(障害者スポーツ)」  
<http://www.mhlw.go.jp/seisaku/2009/02/02.html> (参照 2013-10-01)
- 日本障害者スポーツ協会(2013)「日本の障がい者スポーツの将来像」公益社団法人日本障害者スポーツ協会 [http://www.jsad.or.jp/about/pdf/vision\\_future.pdf](http://www.jsad.or.jp/about/pdf/vision_future.pdf) (参照 2013-10-01)
- International Paralympic Committee, IPC Historical Results Database  
<http://www.paralympic.org/Athletes/Results> (参照 2013-10-01)
- 岸川千恵他(2012) 日本のスポーツ政策と国際競技力1 ～オリンピックのメダル獲得数実証分析を用いて. 大阪大学大学院国際公共政策研究科  
[www2.osipp.osaka-u.ac.jp/~yamauchi/gakubu\\_hp/2012/paper/1.pdf](http://www2.osipp.osaka-u.ac.jp/~yamauchi/gakubu_hp/2012/paper/1.pdf) (参照 2013-10-01)
- 阿部篤志(2007) 非競技特化型タレント発掘・育成プログラムの評価モデルの開発 ～ プロセス評価のアプローチ ～ 日本体育学会大会予稿集  
[http://www.kozuki.or.jp/ronbun/spresearch/spres04\\_abe.pdf#search='非競技型タレント発掘'](http://www.kozuki.or.jp/ronbun/spresearch/spres04_abe.pdf#search='非競技型タレント発掘')
- 松田直樹(2008) スポーツ現場における競技力向上のためのメディカルサポート 第42回日本理学療法士協会全国学術研修大会  
[http://ci.nii.ac.jp/ez.wul.waseda.ac.jp/els/110006793748.pdf?id=ART0008742310&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1380770289&cp=](http://ci.nii.ac.jp/ez.wul.waseda.ac.jp/els/110006793748.pdf?id=ART0008742310&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1380770289&cp=) (参照 2013-10-01)

# 参考文献

- 清川健一(2002) 中央競技団体の競技力向上システムの現実と課題. 日本体育学会大会号, No. 53, p. 113.  
[http://ci.nii.ac.jp/els/110002535506.pdf?id=ART0002811544&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order\\_no=&ppv\\_type=0&lang\\_sw=&no=1379914113&cp=](http://ci.nii.ac.jp/els/110002535506.pdf?id=ART0002811544&type=pdf&lang=jp&host=cinii&order_no=&ppv_type=0&lang_sw=&no=1379914113&cp=), (参照 2013-10-01)
- De Bosscher(2006) A Conceptual Framework for Analyzing Sports Policy Factors Leading to International Sporting Success. *European Sport Management Quarterly*. Vol. 6, No. 2, p. 185-215, DOI:10.1080/16184740600955087.
- 日本パラリンピアンズ協会(2012) 「第2回 パラリンピック選手の競技環境 その意識と実態調査報告書」 一般社団法人日本パラリンピアンズ協会  
<http://www.paralympians.jp/資料-報告書/第2回-パラリンピック選手の競技環境-その意識と実態調査/> (参照 2013-10-01)
- 日本障害者スポーツ協会「指導者養成概要」公益社団法人日本障害者スポーツ協会  
<http://www.jsad.or.jp/training/system.html> (参照 2013-10-01)
- 日本パラリンピアンズ協会(2011) 「スポーツ基本計画への提言~パラリンピアンからの視点から~」  
[http://www.mext.go.jp/b\\_menu/shingi/chukyo/chukyo5/010/gijiroku/\\_icsFiles/fieldfile/2011/11/11/1312448\\_11.pdf#search=‘スポーツ基本計画に対する提言’](http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo5/010/gijiroku/_icsFiles/fieldfile/2011/11/11/1312448_11.pdf#search=‘スポーツ基本計画に対する提言’) (参照 2013-10-01)
- 西條剛央(2007) 「ライブ講義・質的研究とは何か SCQRMベーシック編」 新曜社
- 佐藤郁哉(2002) 「フィールドワークの技法：問いを育てる、仮説をきたえる」 新曜社

ご清聴ありがとうございました。